

今後も絶えることなく続けていきたい



高岡流綱火更進団
団長 飯田 勇さん

当市に伝わるもうひとつの綱火、それが高岡流綱火だ。高岡流は、地区に住む氏子で構成される「更進団」が、その技術を継承し続けている。

高岡流綱火は、毎年8月下旬、高岡の愛宕神社祭礼の際に、行われる。高岡流綱火を語る上で、外せないのが「くりこみ」だ。

氏子の皆さんが竹筒に火薬を詰めた手製の火花を手に持ち、練り歩く。最後はそれを神社の社に向け、燃えんばかりに吹きかけるのだ。この迫力満点の「くりこみ」は、祭礼の神事の一つ。高岡地区の火難除けや五穀豊穡を願う行われる。そして、この神事の後に奉納されるのが「綱火」だ。

高岡流綱火を伝える更進団は現在、23人。くりこみに使う約100本の手持ち火花も、更進団でつくる。炭や硫黄などを調合した火薬を、竹の筒に詰めていく。詰め過ぎても、間に空気が入ってもいけない。破裂する恐れがあるからだ。団長の飯田勇さんは「筒の先に付けた火花が回転する火花は見もの。みんな手づくりだから」と話す。

今では規制も厳しく、火花をつくる作業は市外にある火花の工場で行う。かつては、民家の軒先で詰めていた時代もあったとか。

飯田さんは「国の重要無形民俗文化財が高岡にあるのは誇り。なんとか守ってきたい」と話し、笑顔を見せてくれた。

初 夏の高岡地区を訪ねた

夏暑い日だったが、愛宕神社の境内に入ると、どこかひんやりとした空気に包まれる気がした。社を守るようにそびえる木々が、厳かな雰囲気を作り出している。この愛宕神社で、毎年、祭礼の日に綱火が奉納される。

この日は、高岡流綱火更進団で、お囃子を担う渡邊弘さんと富山薫さんの二人に話を聞くことができた。二人は幼馴染で、更進団でも、5本の指に入る古参だそうだ。

「昔は楽譜も何もない中、先輩たちの音を聞いて、必死に覚えた。それこそ、身体に染み込ませるように」と話す渡邊さん。富山さんは「たたきこまれたよね。見て覚えろ、だからね」と笑う。

技術伝承には時間も世代交代の難しさ

取材中、終始笑顔で、息のあったかけあいを見せてくれた二人だが、次の世代へ技術をつないでいくことの難しさも、感じているようだ。何年前かに、ベテランの団員がまとまって抜けた時があったときの話。新しい人が入って来た時に、技術の伝承がうまくいかず、苦勞をした経験話を話してくれた。「綱の引つ張り合いになっちゃったり、人形がうまくまわらなかつたりして」。「お囃子にしても、僕らは何十時間もかけて覚えたわけだから。そういうところが、世代交代のむずかしさかな」。

世代を超えた交流と地域のつながり

若い世代の入団を願う渡邊さんはこう続ける。「二世代、三世代上の人たちと顔見知りになれる。綱火を通じた交流の場。世代を超えて、地域がつながっていく気がするんです」。地域内、世代間の交流が減った今の時代。高岡地区では、綱火を通じて、地域・世代間の交流が行われている。「年に1回、祭りのときにしか合わない人もいる。でも、やっぱり会えば1年分の話で盛り上がりたりして」。

最後に高岡流綱火の見どころを聞いた。富山さんは「迫力のくりこみ、優雅さの綱火。その対比を楽しんでもらえたら」と笑顔を見せた。「二幕目にやる舟遊びっていう演目がある。途中でお囃子が変わるので、そこも注目してほしい」と渡邊さん。

今年の綱火は8月27日(日)。楽しみながら愛宕神社を後にした。



高岡流綱火更進団
渡邊 弘さん



高岡流綱火更進団
富山 薫さん